

「美しい足」

～知る者の責任～

ローマ10章8節～21節

■ 私達の日線…

目の前にある小さな出来事、その人に起きている感情的な問題。それは一つの入り口です。私達が見るべきことはその背後に神様がしようとしておられる永遠の計画の中の一つの歯車をいかに整えるかにあるのです。ぜひ、全体を見る目線で物事を見る信仰の土台に立っていきたいと願います。

■ 知っているということ…

知ったということは、知った人が成さなければならないことがあるということです。そして、知っているということは、その成さなければならない行動に対して私達の心の中で起こる様々な出来事を管理する能力なのです。知っているのが何が起きた時に判断するのです。しかし、聖書は私たちはそれを知ってはいても悟らないと語ります。美しい蝶を見ると神様はそれぞれの小さな器官を完璧に造っていることがわかり神様の恵みを知ります。それなら私達自身が完璧に造られていないわけではないのです。けれど、私達は蝶よりも尊く造られたことを知ってはいても理解していないのです。それ故に自分が完璧な作品という存在を忘れ間違った自分をどんどん製造しているのです。

■ 手を伸ばして告白すること。

まず、一番最初に御言葉を掴まなければならないのは初めて神様に会おうか出会わないかという時です。大変な戦いや葛藤があり紆余曲折がある中で、けれども決断し、信じますと告白した途端、心に何かが起こるのです。これが聖霊の力であって恵みなのです。目の前にある御言葉を受け入れて自らのものにしようとする時は非常に困難な時です。受け入れて口で告白することが非常に嫌で拒みたいと思います。プライドがあるからです。そんな時、多くの人は「心では思っていないけど、口だけで言います」と言います。それでいいのです。信じた言葉を告白するだけで神様が内に働いて奇跡が起こります。ダビデは詩篇116篇で自分は悩みが多いではないかと神様の前で祈りましたが「すべての人は偽りを言う者だ!」と言って撤回しています。これがダビデの信仰の姿勢です。自分が発した間違った言葉に対してダビデは強い信念をもって否定をしています。信じたことによって発せられる言葉はキリストの復活であり、良い知らせです。私達クリスチャンはどの場所においても、目の前にどんな現象を見ても、それがどれほどに難しくても、それを神は益とすることができると発しなければなりません。

■ 聞くこと、伝えること…

伝える人がいなくては聞くことはできません。遣わされなくては宣べ伝えることはできません。神様が私達に伝えているのは、今とされている時に心を頑なにしない生き方です。私達は神の作品であって良い行いをするために良い行いをもあらかじめ備えられていると聖書は言っています。目の前には良い行いと悪い行いの2つがあり、私達はそれを選ぶことができるのです。良い行いは「備えられている」のであって「させる」とは書いていません。備わっているのなら使わなければならない。心の中に御言葉があるなら伝えなければなりません。私達の人生が聞かずにして信じることはありません。逆に言うならば私達が信じているなら呼び求めなければなりません。聞いています。だから信じなければなりません。私達は宣べ伝えることができるのです。すると人が救われるのです。私達が出て行けばそれは美しい足なのです。美しい足とはイザヤ52:7はバビロン捕囚にあった人々が解放されるということを告げ知らせる人のことについて言っています。パウロはこの言葉を通してこれを福音と言ったのです。その福音は立派な足、麗しい足(口語訳)、美しい足(新共同訳)と言っています。私達の人生の足は美しいでしょうか。先ほ

どまでは福音を伝える「口」と言っていましたが、次は「足」と言っています。足はその人全体を表していて、遣わす、出ていくということを言っています。言葉をどのように伝えるのかということを聖書は「足で」と言っているのです。この足を用いてその場所に出ていかなければわからないのです。私達の教会は2匹の魚と5つのパンを見た時に受けた愛を流すために出ていくということをテーマにしています。その目的は信じさせるためではありません。福音というのはバビロン捕囚からの解放なのです。人生の痛みの中にある人に良い知らせを告げたいのです。それは単純に私達がそれを知って、幸せになったという証しなのです。ですから私達クリスチャンが良い知らせを人生の中で行って幸せにならなければ意味がないのです。近くに置いていだけでは意味がないのです。

■ 人生で御言葉をもって戦っていますか？…

とげが出ている現場に行くのに安全靴を履かずに行けばケガをするのは当たり前です。聖書は悪魔が放つ火矢に打ち勝つために神の武具を備えたと言っています。目の前に反発する敵が向かってくる時に同じように罵り合っていないでしょうか。近ければ近い存在であれば困難ではないですか。その一番近い存在とは自分自身です。ゴリアテと闘ったダビデの信仰は、「主が共におられ私と共に戦われる!」という彼の言葉から出ています。「万軍の主」という御言葉がゴリアテを打ち砕いたのです。近くにある御言葉を自分のものとし、それを行って奇跡を体験した人だけが証者として宣教ができるのです。これは神の恵みです。

■ 聞くことが大切です…

聞いたように伝えなければなりません。自分が語られた御言葉を隣人に自分の言葉として伝える時に自分の中に奇跡が起こりその隣人にも奇跡が起こるのです。神の恵みです。けれど、御言葉を聞いて相手を見ると裁きます。自分が聞いたことと相手がしていることが違うからです。しかしそれは自分と同じです。自分ができていない要素を相手に見出そうとします。その時に相手に言う言葉は御言葉ではありません。心の中にある色々な思いをその言葉を通して遠回しに相手に伝えようとしてしまいます。その結果、その言葉は自分自身をむさぼって自分自身の中に大きな悪を生み出します。なぜなら、御言葉が自分をつくりかえるのではなくて、人の言葉が自分を滅ぼすからです。これが対照的な出来事です。ですから、信仰のバロメーターは御言葉と一致しているかどうかです。そして愛して人に伝えなければ変化は起きません。私達はキリストの言葉をもって行わなければなりません。御言葉を口に持ち、いつでも出るように覚えて下さい。誰かの所に行く時、祈って御言葉を覚えて行って下さい。御言葉を伝えるのです。私達は人生を変えるほどの御言葉を握っているのです。御言葉を信じて告白しましょう。奇跡が起こります。

今までの決断を棄ててイエス様と共に生きる 決断をもう一度し、祈りましょう…

神様。あなたの前にした決断、人を前にした決断、自分自身が痛みの中でした決断を今すべて棄てます。もう一度私を真っ白にして下さい。そしてその真っ白なキャンパスの中心にイエス様あなたがきてください。その隣に私を置きます。そして、左手には大切な人、右手には愛せると思えないような人をおきます。その絵を保ちます。私はイエス様と共に生きます。イエス様、あなたが私に力を与え、立たせて下さることを信じます。

(要約者:全本 みどり)

(2019年9月22日)